

【大学生】 大学での不適応など、大学生が抱える問題

「エア一通学」という言葉があります。入学した大学での不適応があるということを、親には言えず、一日行ったふりをしてどこかで授業時間を潰しているということです。

時間を潰すのはなかなか大変なことなので、このやり方は1年未満の人が多いのですが、中には2年間も続けていた人がいます。この人は「大学に行ったら、思っていたのと違う」「このまま勉強を続けることだけは嫌だ」「辞めるというのもなんだか嫌だ」「相談なんかしたくない」ということだったのですが、入学直後に、父親にこのことを言ったら、「とにかく、卒業しろ！甘えるな」としか言われず、2年にも亘る「エア一通学」を続けた後、それが見つかってしまい、その後なんと7年もの間、引きこもってしまったというツワモノでした。そのしぶとさを武器にして、今はしっかりと働き続けています。

子供に何かいつもと違う様子があつたら、「上手くいっていないことがあるのだな」と考えて、「あなたの雰囲気はいつもと違うように感じているのだけど、何かある？」とか「なんだか様子がおかしいと思うけれど、困っていることがあるのではない？勘違いしているかもしれないけど」などと、親が気づいていることだけは、何はともあれ、気づいたその時に、穏やかに・シンプルに、本人に伝えておくことによいです。

ここで、上に書いた父親の対応のように親が焦って何とかしようとし、緊張して強い言葉で対応すると、子供は叱責されると勘違いし、親子関係が悪くなることがあります。こじれると暴言・暴力が出てしまうこともあります。本人にいきなり、大学に行っていない理由を尋ねる前に、まずは親自身が落ち着くことを優先しましょう。

大学に行かなくなるには何らかの「本人なりの事情があります」。それを聞けたとしても親には理解できない場合がたくさんありますが、親が落ち着いたら、まずは本人に尋ねてみる必要があります。尋ねても返事してくれないときは、「あなたなりの事情があるはず」と言うことが肝心です。「本人なりの事情」を聞いてくれていることが子供には伝わり、そのような親には、やがて子供から話してくれます。

「本人なりの事情」というのは、たいがい「他人からは理解されないだろう、大学に行かない理由にはならないと判断されるだろう」と本人が思っていることなので、なかなか話してくれません。また、本人自身にもはっきりと解らないこと(病気の場合など)もあります。家族だけでは解決しきれないこともあるので、その場合は誰かに相談して、どのように対応していったらよいのかという先の見通しを見つけてください。

ここで大事なことは、親子共に現実をみるということです。「子供なりの事情があるはず」と考えることが少しでもできるようになったら、子供と一緒に、あるいは親だけでも良いので、授業の出席状況や単位の取得状況などの事実を確かめることから始めましょう。子供と今後のことを話しあうのはその後からでよいのです。

大学での問題は、「履修登録ができない」「単位取得ができていない(思ったより勉強が難しい、起床できず朝一番の必須科目がとれていない、体育だけダメ)」とか、「発表ができない・レポートが書けない」「大教室でうるさくて出席する気になれない」「教科ごとの教室移動ができない」「バイトやサークル活動が優先」「人間関係で悩んで登校できない」「就活問題」など、様々なことが絡んでいることが多いようです。

大学には学生相談室があります。「メンタル(精神的に問題を抱えている状態を若者はこう呼ぶことがあります)」と言われることが嫌で本人が利用しないことも多いようですが、保護者の相談を受けつけています。単位取得に関しては、教務課に問合せをすることも可能ですし、担当教授と保護者が相談をすることも、今では珍しくなくなっています。まずは、現実を知ることから始めましょう。

執筆：認定特定非営利活動法人育て上げネット 「結」相談員 森 裕子・墓田 薫

「ニート・ひきこもりの子をもつ親の会『結』」
(運営：認定特定非営利活動法人育て上げネット)

若者の「働く」と「働き続ける」を実現するために、若年無業者就労基礎訓練プログラム「ジョブトレ」など、多方面からの支援を行っている「認定特定非営利活動法人育て上げネット」の活動の一つで、親をサポートするための会。1か月ごとの定期相談やすぐ実施できる「接し方・伝え方」ワークショップ、親同士の気軽な茶話会などを提供している。



墓田さん

森さん

東京都教育庁「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」ホームページ